

東北大学による東日本大震災6ヶ月後報告会

慶長津波と震災復興

東北大学東北アジア研究センター

蝦名 裕一

東日本大震災

平成23年(2011)3月11日 14時46分 東日本大震災発生

- ・東北地方太平洋沖地震...マグニチュード9.0
 - ・太平洋岸一帯における大津波の発生
 - ・マスメディアの各種報道、インターネットにて被災者が写真・動画を発信
- 津波被害の実態、凄惨さを目の当たりに

○歴史津波の視座からの警告

- ・飯沼勇義氏、渡辺慎也氏:過去の歴史津波から津波発生を警告
 - ・今村文彦氏:貞観11年(869)の大津波を想定した防災計画構築を提唱
- 災害における歴史記録、先人達の警鐘の重要性

東日本大震災

○東日本大震災は”1000年に1度”の災害か？

貞観11年(869)	貞観津波	M8.3~8.6	死者1,000余
慶長16年(1611)	慶長津波	M8.1	死者仙台藩1,783 南部・津軽3,000余
寛政5年(1793)	寛政津波	M8.0~8.4	死者約100
明治29年(1896)	明治三陸津波	M8.2~8.5	死者21,959
昭和8年(1933)	昭和三陸津波	M8.1	死者1,522、行方不明1,542
昭和35年(1960)	チリ地震津波	M8.1~8.3	死者142名
平成23年(2011)	東日本大震災	M9.0	死者・行方不明者約2万人

○慶長16年(1611)の地震・大津波＝貞観大津波以降では最大規模(今村1934)
慶長大津波の津波堆積物→山元町・亶理町の海岸線から500m内陸部で発見
三陸沿岸の歴史資料、伊達政宗、スペインの探検家ビスカイノの証言

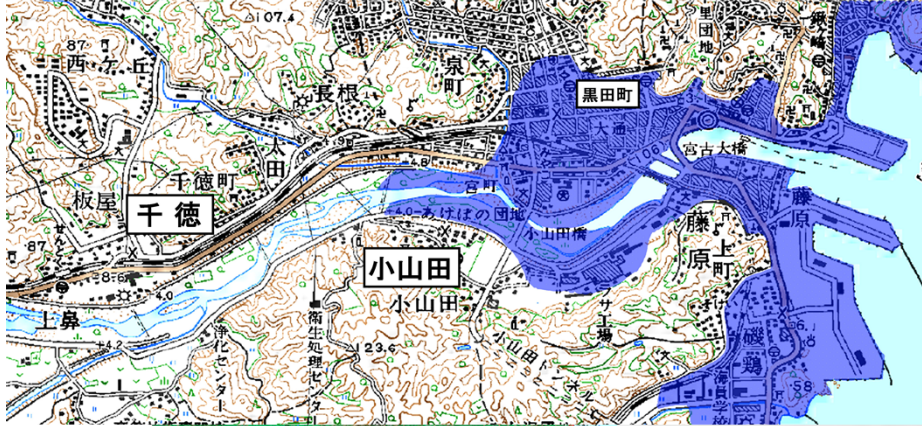
→一方、慶長津波の歴史記録を創作・誇張とみる懐疑的な見解も

<本発表の課題>

- ・平成大津波の経験をふまえ、慶長大津波に関する史料の再検討
- ・”慶長大津波”と“災害からの復興”という視点でこの時期の史料を再検討。

* 復興の定義「津波被害の実情に対応した開発政策」

慶長大津波の被害状況と浸水域



◇盛岡藩の記録

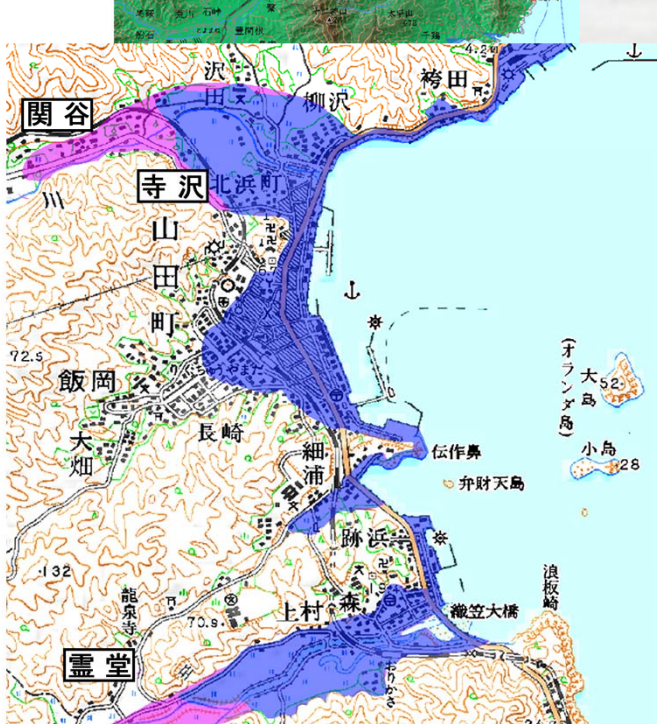
- 「大地震三度候而、夫より大波出来」(『古実伝書記』)
- 「朝より度々地震、浪押上候前、沖の方とんとなり候と大波山のごとくにて参、川に付、塩水上り、引塩には、大杉古木家共々を引崩申候、」(『大槌古城記』)

→朝から断続的に続く振動、3回の大揺れ、津波時に川を遡る海水、強烈な引波

* 東日本大震災：震度5以上が連続3回
11日中に震度4以上の揺れが45回

<津波浸水域> (『古実伝書記』)

- 現宮古市域 小山田→千徳
- 現山田町域 寺沢→関谷、織笠→霊堂

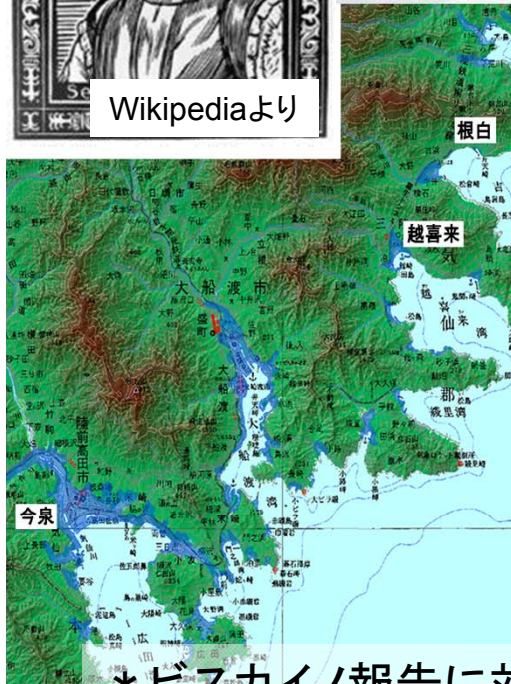


慶長大津波は、平成大津波と同等かそれ以上の規模

ビスカイノ証言の検証



Wikipediaより



・セバスチャン・ビスカイノ(1548－1615)

慶長16年(1661) 来日。伊達政宗の知遇を得て三陸沿岸を調査中、津波に遭遇。

◆「ビスカイノ金銀島探検報告」

○10月28日 越喜来

・海上で地震に遭遇、一行に追隨していた船2艘が沖で沈没。

・住人達が「村を捨て山に逃げ行く」。

・「海水は一ピカ(三メートル八十九センチ)餘の高さをなし、其堺を越え、異常なる力を以て流出し、村を浸し、家及び藁の山は水上を流れ、甚しき混乱を生じた」

・「海水は此間に三回進退」し、多くの人命や財産が失われた。

・ビスカイノ一行は「村に着き免かれたる家に於て厚遇を受けた」。

○10月29日 根白

・根白に宿泊。「同村は高地に在り海水之に達せざりき」「十分の給與を受け」た。

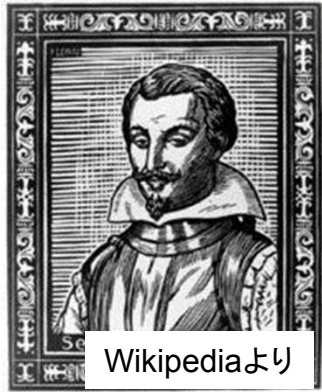
○11月1日 今泉

「海水漲溢の為め村の家は殆ど皆流され」「五十余人溺死」「妻子及び財産を失いて悲嘆」ビスカイノ一行も「宿泊する所を得る能はず」

* ビスカイノ報告に対する疑問...→「地震・津波に関する記述はすべて疑わしい」(渡邊1999)

「ビスカイノ報告を利用することは避けたほうがよい。」(渡邊2002)

ビスカイノ証言の検証



越喜来

- ・わずかな高低差で被害程度に相違
- ・地域有力者の家は高台に位置する傾向



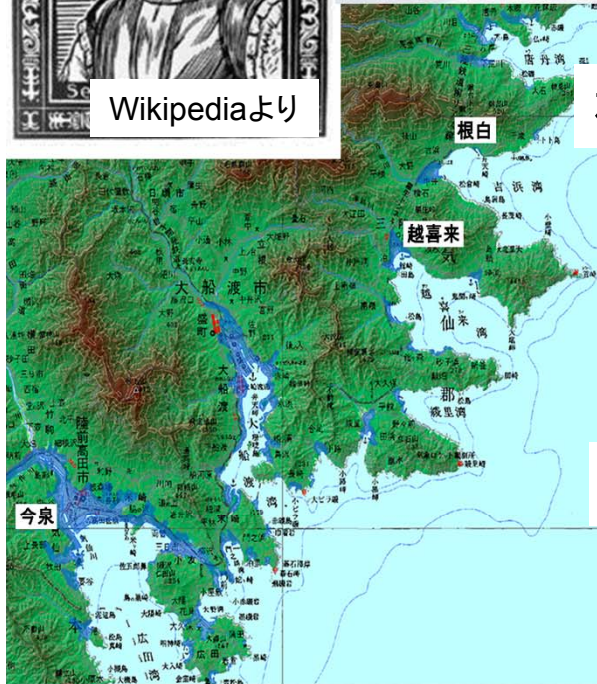
根白

- ・平成大津波でいち早く漁業を再開した根白地区



今泉

- ・現陸前高田市域における壊滅的な被害



ビスカイノ証

政宗の証言—千貫松伝承の検証

○『駿府記』

11月晦日 政宗、家康に初鱈献上、津波について報告

政宗は2人の家臣を漁村に派遣、
天候の不順により一方の家臣だけ舟を出す

「時に海面滔天、大浪山の如く来る。肝を消失し魂を失するのところ、この舟彼の波上に浮かびて沈まず。しかる後、波の平らかなるところに至る。この時心を静め眼を開きてこれを見るに、彼の漁人住するところの里辺、山上の松の傍らなり。これ所謂千貫の松なり。すなわち舟を彼の待つに繋ぐ。波濤退去の後、舟松の梢に在り。…」



伊達政宗像(仙台市博物館蔵)

津波後、舟は松の梢に打ち上げられ、漁師の村は壊滅

*「千貫松」...現宮城県岩沼市の千貫山(標高186メートル)

→津波としては不自然な数値

→「千貫松物語は伊達政宗が貞観津波を慶長津波と結びつけた創作」(渡邊1999)

政宗の証言—千貫松伝承の検証

・『駿府記』の記述

→「後藤少三郎」なる人物の伝聞

・『貞山公治家記録』:『駿府記』の記述に疑念
「千貫松ト云ハ一株ノ松ノ名ニ非ス。麓ヨリ峰上数千株
一列ニ並立テリ。終ニ山ノ名トナル。名取郡ニアリ。
逢隈河ノ水涯近ケレハ、海潮ノ餘波、此河水ニ入テ泛
濫シ、麓ノ松ニ舟ヲ繋ク事モ有ルヘキ歟。」

・阿武隈川河道の変化

かつては南長谷村付近で旧河道と「新川」に分岐

=旧河道を遡上した津波が千貫山に到達した可能性

松の梢の舟(被害状況)

+

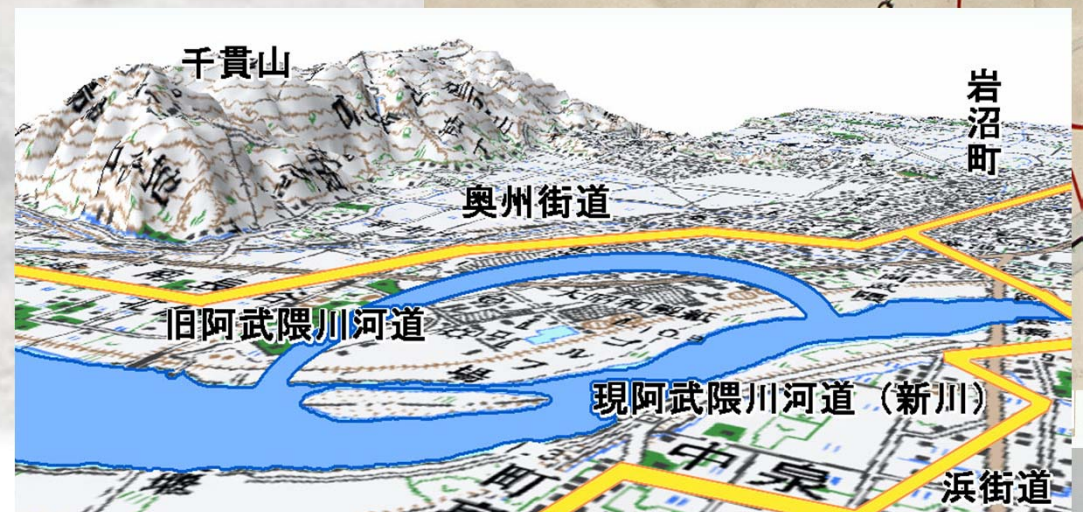
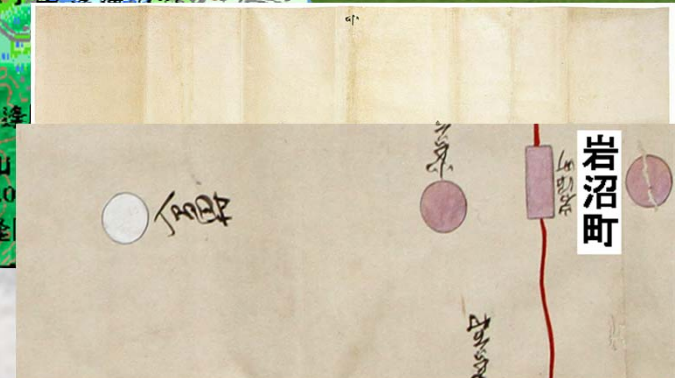
千貫山に到達した津波

↓

千貫松伝承



千貫山(岩沼市HP)



大名たちの復興事業

○盛岡藩：藩主南部利直

- ・宮古代官が津波後、被害状況を見聞し、盛岡に報告。
→盛岡からは「身帯相応ニ御助金被下候」
- ・南部利直の宮古訪問
自ら町割をおこない、「市相立候ても苦しからぬ場所」と指示
...のちに宮古は城下盛岡の外港として発展

○仙台藩：藩主伊達政宗

- ・慶長期、家臣を主体とする野谷地開発の進行
- ・大津波の後、内陸の宮城県郷六から
津波被災地に移住した佐藤出雲家
「元和ノ頃、御上より荒所開発望令族開発可仕由御觸」
(「佐藤家家譜」)
- 被災地に積極的に開拓者を送り、再開発を促す政宗の政策



伊達政宗像(仙台市博物館蔵)

→大津波からの復興は大名自らが主導すべき重要な政治課題

川村孫兵衛の復興事業

3月11日15時21分 共同通信撮影

阿武隈川

旧早股村

旧下ノ郷村

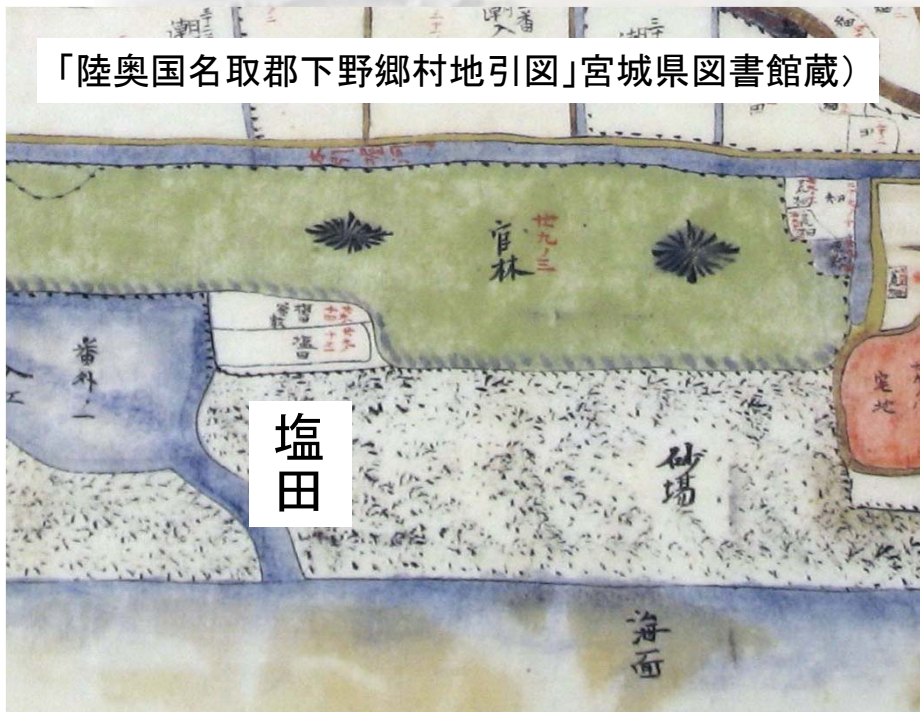
木曳堀(貞山運河)



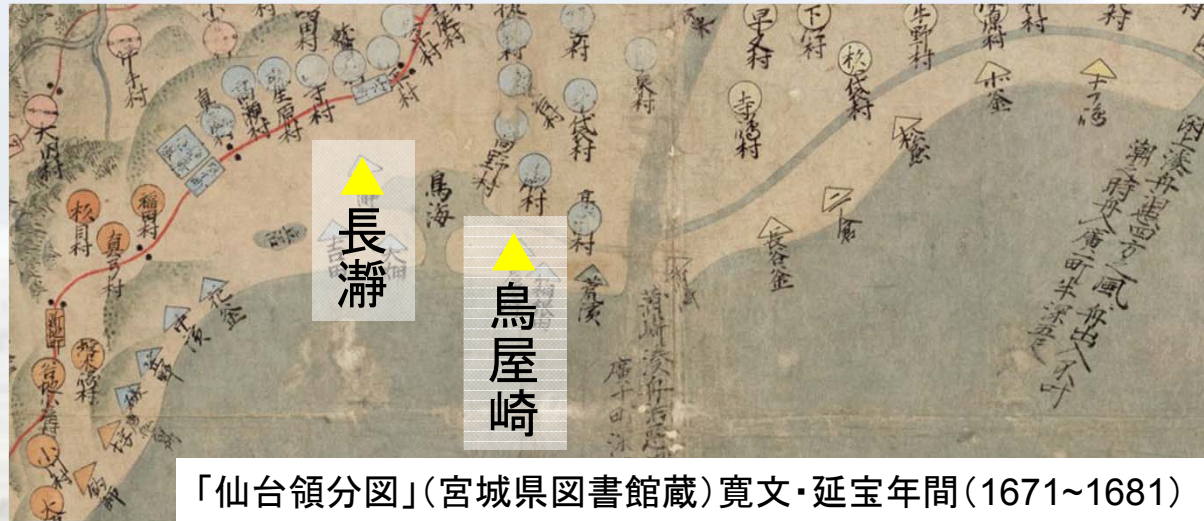
川村孫兵衛の塩田開発

○川村孫兵衛の塩田開発事業

- ・川村孫兵衛は仙台藩に播州(赤穂)流製塩法を伝えた人物とされる
- ・寛文7年(1667)『普誓寺開基略記』(川村孫兵衛の菩提寺)
 - 孫兵衛は「海浜処々に長堤を築いて巨釜を置き、塩を焼かしむ」
- ・宮城県沿岸部の「釜」のつく地名は、孫兵衛が塩煮釜を設置した場所という伝承



川村孫兵衛の塩田開発



「仙台領分図」(宮城県図書館蔵)寛文・延宝年間(1671~1681)

○亘理郡高屋村鳥屋崎浜の御塩場。

『安永風土記』...長門浪人・伊藤三郎右衛門が元和年間、佐々若狭・川村孫兵衛に命じられて鳥屋崎浜の「須賀」にて「御塩場之儀指南仕開発仕」

→大量の塩を産出する良質な「御塩場」に。後、伊藤は各地で塩場建設の「開発指南」加えて塩水の汲み方、諸道具の製造も住民の「渡世相続」となった。

→製塩業という新規産業が、新たな雇用を生み、津波被災地の振興につながる。

○亘理郡鳥海塩神社

元和2年(1616)に牛坂外記が製塩場を設置。良質な塩の生産を祈願するために勧請。

→慶長大津波後、被災地が製塩産業によって「復興」

絵図にみる復興

名取郡二倉浜(元岩沼市押分)

天文22年(1553)『伊達晴宗采地下賜目録』泉田伊豆守が「二のくらのハマ」を拝領

→中世段階に集落が存在

「正保国絵図」では二倉の記述なし。→慶長大津波により衰退、村落に認められず？

「仙台領分図」では「端郷」として描写

「元禄国絵図」では「押分村之内二倉」として描写→慶長大津波による衰退から復興



絵図にみる復興

- ・2代目孫兵衛(重吉養子元吉)の業績に海岸部の植林事業
「...海浜之諸田、多年為海瘴所害、元吉為之栽松数千株以遮蔽之、聿除其患、」『伊達世臣家譜』
「正保国絵図」...内川(木曳堀)の東部は「すか」(砂地)
「元禄国絵図」...内川(木曳堀)の東部に松並木
→川村孫兵衛親子2代にわたる被災地復興事業



震災前の木曳堀(岩沼市HPより)

絵図にみる復興



「仙台領分図」(宮城県図書館蔵)寛文・延宝年間(1671~1681)

仙台領国絵図...160個の端郷のうち、65個が海岸部に集中
→慶長大津波によって被災した地域が、着実に復興

—慶長大津波からの復興—

- 歴史記録は津波災害を詳細に記述
慶長大津波は平成大津波と同程度～それ以上の規模
→「1000年に1度」ではなく、より短期間に発生
 - 従来の慶長大津波のマグニチュードの値なども、要再検討
 - 地名の喪失による災害記憶の消滅という危険性（自治体の合併など）
- 慶長大津波からの復興にみる、大名のリーダーシップ
南部利直...被災地宮古を商業都市・貿易港に
伊達政宗...被災地を新田に
→当時のリーダーたちの明確な復興ビジョン
- 川村孫兵衛らの津波被災地復興事業
豊かな海産資源のメリット → 製塩業の導入
塩害や津波のデメリット → 防潮林の植林
→被災地の地域的特性に応じた復興事業

参考文献

- 飯沼勇義『仙台平野の歴史津波—大津波が仙台平野を襲う！』宝文堂1995
- 今村明恒「三陸沿岸に於ける過去の津浪に就て」『地震研究所彙報別冊第1号』東京帝国大学地震研究所1934
- 宇佐美龍夫『新編日本被害地震総覧』東京大学出版会、1987。
- 同「江戸時代における三陸地方の地震活動」『東京大学地震研究所彙報』第53号、1988。
- 澤井祐紀・岡村行信・穴戸正展・松浦旅人・Than Tin Aung・小松原純子・藤井雄士郎「仙台平野の堆積物に記録された歴史時代の巨大津波—1611年慶長津波と869年貞観津波の浸水域—」『地質ニュース』629号、2006。
- 羽鳥徳太郎「岩手県沿岸における慶長(1611)三陸津波の調査」『歴史地震』11号、1995。
- 都司嘉宣・上田和枝「慶長16年(1611)、延宝5年(1677)、宝暦12年(1768)、寛政5年(1793)、および安政3年(1856)の各三陸地震津波の検証」『歴史地震』11号、1995。
- 渡辺慎也「大津波への備え」河北新報『座標』2007年9月4日。
- 渡邊偉夫「ビスカイノが見た1661年慶長三陸津波の実態」『歴史地震』11号、歴史地震研究会、1995。
- 同「三陸津波に來襲した貞観津波と慶長津波に関する疑問の資料(記述)」『津波工学研究報告』16、1999。
- 同「ビスカイノが見た慶長(1611)三陸大津波」『月刊海洋号外No.28 総論:津波研究の最前線Ⅱ—過去の津波の事例研究—』海洋出版株式会社、2002。
- 『宮城県史8 土木』宮城県、1957。『宮城県史9 産業』1968。『岩沼市史』岩沼市、1984



—東日本大震災からの復興を祈念して

終